

関西菌類談話会会報

2004年6月 No. 25



目 次

表紙 [イボセイヨウショウロ]	谷口 雅仁	1
吉見昭一先生 (1928-2003)		2
追悼 吉見昭一先生	上田 俊穂	3
吉見昭一先生を悼む	相良 直彦	4
業績一覧, 著作一覧		4
吉見先生の思い出		
吉見先生とのこと	布村 公一	6
吉見先生の思い出	本多 澄夫	9
吉見昭一先生との思い出	小寺 祐三	10
吉見先生との出会い……そして、赤い菌糸に導かれて	富田 友絵	12
投稿記事		
マジックマッシュルーム騒動記	鳥越 茂	13
菌学会展示「アマチュア研究者の取り組み2003」レポート	佐久間大輔	14
アカイカタケ発見	西川 忠樹	16
地方での菌学学習の困難さ	池田 良幸	17
表紙によせて、編集後記など	編集委員会	20



吉見 昭一 Shoichi Yoshimi (1928-2003)
1999年、丹後にて（撮影は大宮町教育委員会・中邑正樹氏）

追悼 吉見昭一先生

関西菌類談話会会長 上 田 俊 穂

2003年の早春、吉見昭一先生はあの世へ旅立られました。ここからお悔やみ申し上げます。菌類研究家としての吉見先生は、種々の啓蒙書だけでなく、きのこ関係のすぐれた業績をたくさん残されましたが、私には遣り残されたことがまだいっぱいあり、それをリュックに詰め込んで、あの世でゆっくりその続きをされようとしていると思えてなりません。まことに拙い文章で恥ずかしい限りですが、謹んで追悼の文を書かせていただきます。

吉見先生の本職は申し上げるまでもなく学校の先生で、その責務は立派に果たされましたが、私たち関西菌類談話会の多くの会員は教師としての吉見先生ではなく、きのこ研究家としての吉見先生を存じ上げていました。先生は大きなお声で誰にも分け隔てなく、親切にいてねいに接してくださいました。とくに小さな子供たちにはこぼれるような笑顔で話されていました。先生のそのような真心が多くの人々に通じ、影響を受けたたくさんの方々が自然研究の道、とりわけきのこの研究の道に誘い込まれていきました。これはまことに偉大な業績であると思います。

何時でしたか、私は先生に腹菌類の卵からきのこが出始め、胞子が成熟するまでの様子を写真撮影されたときの苦労話をうかがったことがあります。私よりずっと年長の先生が夜を徹して撮影される様子をお聞きし、その情熱と体力に心から圧倒されました。そして私には、そのような情熱も体力も持ち合わせていないことに茫然とさせられた記憶があります。

関西菌類談話会の創始者であられる浜田稔先生が京都大学農学部応用植物学研究室におられたころ、つまり関西菌類談話会が「関西談話会」と呼ばれていたころ、吉見先生が会合の案内印刷やその発送をされていたことを覚えています。そのいくつかは今も手許に残してあります。その後、

吉見先生は関西菌類談話会の役員として、また、きのこ展実行委員長としても長年にわたりお世話をして頂き、今の学会の発展の礎となる大きな貢献をされました。先生がご健在の頃から何人かの会員が、ぜひ「腹菌類図鑑」をつくってくださいとお願いしておりましたが実現しませんでした。きっと、「クワの葉をお食べになるのに一生懸命で、菌をお作りになる時間がなかった」のでしょう。あるいはあとに残った先生の「きのこの教え子」への宿題とされたのかもしれませんが。

最後に先生がご病気を押してお書きになった「京都府レッドデータブック2002」と「京都府自然環境目録2002」のいずれも菌類部門のことを紹介させていただきます。これには吉見先生のお宅で先生と他3名が3年にわたり何度も会合を持ち、先生のおてつだいをさせていただきました。一方、先生はそれとは別に関連する全体の会議に何度も出席され、他の分野との調整や私共の意見の代弁をされていました。環境目録に関連して京都府北部の山地へ一緒に調査に参りましたことが、つい最近のように思われます。上記の本ができる前年にも先生のお宅で会合を持ちましたが、ご病気を押してお姿が本当にお気の毒でした。しかし私共は、先生のきのこ研究へのひたむきな情熱を間近に感じる事ができたのでした。

先生亡き後の腹菌類の研究家は、今のところ関西では不在のままではないかと危惧しており、一日も早く後継の方々が現れることを願っている次第です。

吉見先生、もっといろいろお教え頂きたかったのに残念でなりません。そちらのきのこの発生具合はいかがでしょうか。どうかゆっくりご研究ください。

2004年2月2日

(連絡先：〒617-0816 京都府長岡京市西の京14-2)

吉見昭一先生を悼む

相 良 直 彦

弔辞に代えて

葬儀に当たって私は弔辞を述べるべき立場にいるのではないかと思ひながらも、どうしたらよいかわからないまま式は終わりました。その間私の頭の中にあったことを文章にして、追悼の言葉といたします。

郷里・大分県の山村で山仕事・野良仕事に明け暮れていましたが、訃報に接してあわただしく出て参りました。僭越ながら菌学関係者を代表して、弔辞を述べさせていただきます。

吉見先生の寛い心・温かい心に包まれ、また行動力に助けられてきたという実感が私にはあります。吉見先生の菌学における貢献は、日本菌学会教育文化賞の授賞、さらに日本菌学会名誉会員への推挙に示されていると思います。日本菌学会の

年次大会が京都で開催された折りには、大会副会長として、いたらぬ会長の私を大いに助けてくださいました。関西菌類談話会が40年以上にわたって続いているのも、吉見先生の無私な尽力に負うところが大きいと思います。

吉見先生が龍谷大学で担当しておられた「野外観察法」という授業科目を私が引き継いでおりますが、この科目は夏期の集中授業でありまして、暑さとの闘い・体力勝負と言うべき、きつい授業であります。それを、よくもまあ3年前までやりなつたものと感心しておりました。人生を全力で走ってこられて、身体に無理が及んだのではないかと思います。しかし、先生が播いた種（たね）は多く、また広くに及んでいます。きっと実りは豊かなことでしょう。安らかにお眠りください。

以下に、先生自筆の履歴書と業績書（1996年10月15日付け）および御遺族から頂戴した資料に基づいて先生の生涯と著作をまとめてみました。著作目録を情報として提供するのが本稿の主な目的です。口頭発表や講演も沢山ありますが、それらは省きました。

吉見先生の生涯

略 歴

1928年（昭和3年）8月6日徳島県に生まれ、2003年3月25日京都市にて死去、享年74歳。1945年徳島県立富岡中学校を卒業ののち、海軍経理学校、徳島師範学校、徳島大学学芸学部、立命館大学法学部を経て、1956年立命館大学大学院法学研究科を中途退学。その間、1950年に一時富岡中学校教諭を勤め、1951年より京都市立小学校教諭として各地の小学校に勤務、1982年京都市教育委員会事務・指導主事、1983年藤ノ森小学校分校建設準備室長ののち、1984年錦林小学校校長となり、

1987年停年退職した。その後は、京都市教育委員会特別社会教育指導員（1988-2002）、橘女子大学非常勤講師（1989-1998）、龍谷大学非常勤講師（1992-2000）、京都女子大学非常勤講師（1992-2002）、農林水産省森林総合研究所非常勤研究員（1992、1993）、鞍馬山保育園理事（1994-）、京都大学大学院人間・環境学研究科研究生（1995、1997）、などを勤めた。

学会・研究会活動

京都市小学校図書館研究会（1951-、副会長1985-1986、参予）、関西菌類談話会（1963-、副会長1993-2001）、日本きのこ同好会（設立、1967-）、日本菌学会（1968-、年会副会長1998、名誉会員2002-）、京都市特別活動研究会（1977-1987、会長1984-1987）、近畿特別活動協議会（1977-1987、副会長1984-1987、参予1987-2002）、京都科学読み物研究会（設立、1980-）、日本冬虫夏草の会（1981-、名誉会員2002）、日本菌学会関東支部

(1991-)。

社会的活動

鞍馬山自然科学博物苑展示室専門委員 (1971-、きのこ展示1994-2001)、関西菌類談話会きのこ展示実行委員 (1974-2001)、京都御苑キノコ観察学習会 (1977-)、子どもの文化・教育研究所全国小・中学生作品コンクール理科部門審査委員 (1984-1987)、三重県藤原岳自然科学館きのこ観察同定会 (1987-2001)、国立科学博物館講座「菌類の多様性と分類」(1988-2001)、京都市立科学センターきのこ同定会 (1990-2001)、京都府大宮町カリヨン童話コンクール審査委員 (1995)。

受賞

京都新聞五大賞第30回教育賞 (1995)、日本菌学会第1回教育文化賞 (1997)、従五位勲五等瑞宝章 (2003)、京都市教育功労賞 (2003)。

著作目録

1. 著書

- (1) たおされたカシの木, 単著, 文研出版, 1976/6/20
- (2) キノコの女王, 単著, 大日本図書, 1977/9/10
- (3) 日本のきのこ図版 No. 1000 まで, 日本きのこ同好会, 青木実・吉見昭一編, 1978 非売品
- (4) 小さなコップのひみつ, 単著, 大日本図書, 1979/5/20
- (5) 森の妖精 キノコ栽培の父森本彦三郎, 単著, 偕成社, 1979/4/1
- (6) 京都の理科ものがたり 消えていくキノコの女王, 一部執筆, 日本標準, 1980/11/20
- (7) 日本のキノコ, 単著, 岩崎書店, 1981/9/10
- (8) おどるキノコ, 単著, 岩崎書店, 1983/5/31
- (9) 虫をたおすキノコ, 単著, 大日本図書, 1984/9/14
- (10) 京都のキノコ図鑑, 共著, 京都新聞社, 1986/11/15
- (11) 日本のきのこ, 一部執筆 (腹菌類解説), 山と溪谷社, 1988/11/10
- (12) 原色日本新菌類図鑑 (Ⅱ), 一部執筆 (腹菌類亜綱執筆), 1989/5/31
- (13) 大文字山, 一部執筆 (きのこの部分), ナカニシヤ出版, 1991/8/16
- (14) 総合ガイドシリーズ
 - 1 鞍馬山・貴船溪谷, 1991
 - 2 京都御苑とその周辺, 1991
 - 4 伏見稲荷・伏見桃山, 1991
 - 5 嵯峨野保津峡, 1991
 - 6 糺ノ森・鴨川, 1991
 - 9 上賀茂・府立植物園, 1991
 - 10 山科・醍醐・宇治, 1996京都新聞社, きのこの部分執筆
- (15) 日本のきのこ, 監修, 成美堂出版, 1994/9/25
- (16) 尾越のいのち 尾越山林環境調査報告書, 一部執筆 (きのこの部分), 京都女子学園出版, 1995/11/1
- (17) 北稜に光を観る 玄武計画調査研究資料集, 一部執筆 (きのこ・林相), 玄武の会出版, 1995/4/16
- (18) 四季のきのこ, サンライフ企画, 1996/10
- (19) 菌類一改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—植物Ⅱ, 一部執筆 (pp. 315-409), (財) 自然環境研究センター, 2000/12
- (20) 那須御用邸附属地の菌類—那須御用邸の動植物相, 共著 (pp. 333-356), 栃木県立博物館, 2002/2/28
- (21) 菌類—京都府レッドデータブック上, 野生生物編, 共著 (pp. 878-916), 京都府企画環境部環境企画課, 2002/4
- (22) 菌類—京都府自然環境目録, 共著 (pp. 256-278), 京都府企画環境部環境企画課, 2002/4
- (23) 京都府レッドデータブック [普及版], 一部執筆 (pp. 158-169), サンライズ出版, 2003/3

2. 雑誌記事

- (1) 自然, 中央公論社, Vol. 35-No. 3 (第409号), 「溶けるキノコ」, 1980/3
- (2) 採集と飼育, 第41巻第10号, 日本科学協会, 「スッポンタケの源流は熱帯か」, 1979/10
- (3) 採集と飼育, 第42巻第9号, 日本科学協会, 「冬虫夏草のふしぎ」, 1980/9
- (4) 採集と飼育, 第44巻第10号, 日本科学協会,

「カゴタケ」, 1982/10

- (5) 採集と飼育, 第44巻第11号, 日本科学協会,
「腹菌類というキノコ」, 1982/11
- (6) 藤原岳自然科学館館報, 第11巻 (1988) ~
第20巻 (1997) 第24巻 (2001), 「藤原岳山
麓及び近辺のキノコ調査報告書」
- (7) 京都御苑自然現況調査報告及び追録, 京都
御苑保存協会, 第1集, 1990
第2集, 1992
第3集, 1995
第4集, 1998
- (8) 冬虫夏草, 日本冬虫夏草の会, 創刊号から
11号まで連続, 「西日本の冬虫夏草覚書」
- (9) 日本菌学会会報, 第38巻 (pp. 279-280),
「菌学の普及を図る」, 1997

3. 論文

- (1) 国立科学博物館専報, 第22号 (pp. 30-41),
「日本産腹菌類の研究 (I)」共著, 1989/
12/1
- (2) Nakaike, T. and S. Malik [eds.], *Cryptogamic
flora of Pakistan*; Vol. 1, 165-184, 1992
“Gasteroid Fungi from Pakistan” S. Yoshimi
and H. Hagiwara
- (3) 国立科学博物館専報, 第34号 (pp. 321-326),
「皇居吹上御苑産腹菌綱 (担子菌門)」,

2000/12/25

- (4) 日本菌学会会報, 第43巻 (pp. 3-18), 「日
本産ニセシヨウロ属」, 2002

編集委員会注

吉見先生ご自身が作成された業績リストです
が, 業績の表示方法は一部変更いたしました。
「採集と飼育」は「飼育と栽培」と誤記されてい
ましたので訂正しました。また, 「国立国会図書
館蔵書検索・申込システム」(NDL-OPAC) を利
用して吉見先生の業績を検索すると, 上記リスト
に未収載の業績として下記のものがありました。

- 菌類教育の必要性 吉見 昭一, 生物教育. 26(2)
[1985. 09]
- 生物学教材・生物クラブ・同好会の対象になる菌
類, 吉見 昭一, 季刊自然科学と博物館.
48(3) [1981]
- 科学読物と自然観察会, 吉見 昭一, 学校図書館.
(通号 360) [1980. 10]
- ホンシヨウロの菌輪, 吉見 昭一; 黒柳 悦次
日本菌学会会報. 19(4) [1978. 12]
- 傘の形でわかる日本のきのこ, 吉見 昭一 [他].
成美堂出版, 2002. 10. — (ポケット図鑑)
- 日本産腹菌類知見, 吉見 昭一. 北海道キノコの
会, 1992. 9

吉見先生とのこと

菌学教育研究会 布 村 公 一

私と吉見先生との接点を探てみると, 1972年頃, 入っていた日本キノコ同好会の青木図版にその名前を見たことに始まります。1977年9月に青森県おいらせ溪谷で日本菌学会採集会が開かれたときに, 私が採集したチャダイゴケの種名について横山和正氏が吉見先生に聞いてみると言われて持ち帰られました。その後そのチャダイゴケは横山和正氏の同定でコチャダイゴケであることのお手紙をいただきましたので, 吉見先生から直接お手紙をいただくことも, お会いする機会もありませんでした。その後私は横山和正氏のお奨めによ

り関西菌類談話会に入会して, 案内により吉見先生のお名前を拝見することが多くなりました。しかし遠いことと曜日の制約があって例会に参加する機会はありませんでした。1977年に私は那須でホコリタケ属かノウタケ属の大きなキノコを採集して横山和正氏に標本を送りました。これも吉見先生にお渡しすることでした。このキノコは実際に吉見先生の手元に届いたことが後日わかりましたが, 同定が難しかったようで, いまだに名前をはっきりしていません。それでこのときも直接のお手紙もお話もいただけませんでした。

1979年9月15日に関西菌類談話会例会が伏見稲荷で行われました。このとき、私は勤務校の生徒を連れて始めて参加して、先生についてお会いすることができました。このとき上記の那須のキノコや東京で採集した腹菌類を数種持参して同定していただきました。しかし、那須のキノコは手元にあるとは言われましたが名前はおしやいませんでした。その後は何度も採集標本をお送りして同定をお願いし、お返事をいただくことがたびたびでした。それで今私の手元にはいろいろなお手紙が残っています。この年には吉見先生が東京にお出でになるというので、私の出身、東京薬科大学第一微生物学教室にお招きして腹菌類についてご講演をしていただきました。それは教室の宮崎利夫教授がシラタマタケ、スッポンタケなどの多糖類を研究されていたからです。当時大学はキャンパスを八王子に移転したばかりで自然の中にありましたので学内の林で教授、教室員と共に観察されてハナサナギタケほかのキノコを採集されました。後のお便りで薬科大学の周辺はとてもよいキノコの採集場所なので腰を落ち着けて調査してくださいとのことでした。しかし、私は腰を落ち着けて観察する時間がなく先生の期待にこたえられず残念な思いがしますが、1982年7月にハナヤスリタケを採集して先生に標本をお送りしたことで幾分役目を果たしたかと思えます。

その後勤務校の修学旅行の自由時間、下見の帰りなどに京都で数回お会いしました。一度はお宅にお邪魔して、近くの修学院離宮と一緒に採集に連れて行っていただき、始めて「ツチアケビ」を観察する機会に恵まれました。1987年には勤務校の自然科学部合宿に先生をお招きして山形県米沢

市板屋まで来ていただき、一緒に採集しました。このときはいろいろな種類のイグチとヤグラタケが採集できたことでこの場所に興味をもたれました。また、根城とした民宿ではタマゴタケのお吸い物が出されて大変おいしい思いをしました。このように先生は近畿地方はもとより日本中を歩いてキノコの研究をなされました。熊本きのこの会の会報によれば熊本へは毎年のようにお出かけになられており、北海道、神奈川、東京、多摩、千葉、愛知、三重、四国、それぞれに多くの方々とお交わりを持たれて、お誘いがあれば時間とお体が許すかぎり採集とご講演に出かけられました。私は1996年に明治学院中学校、東村山高等学校を定年で辞した後、菌学教育研究会の事務をすることになり、2001年まで4回東京に来ていただき「腹菌類の分類」についてご講義をいただきました。そのたびに先生の原稿をテキストにする作業をさせていただきました。ホコリタケ科の各論としての原稿は100枚以上の書き溜めた図と説明文を用意されて、その中から100枚の図版を選んで作成しましたが、原稿をワープロに直すには友人の力を、選択するには勤務校の卒業生の力を借りる必要がありました。このテキストは現在、菌学教育研究会で保存していて、各論はコピーが大変なため頒布していませんが、下記の日録のテキストは頒布しています。

先生の粘り強い観察と目の付け所の鋭さをご著書の図や文章に見られます。「キノコの女王」のキヌガサタケの伸長の様子、午前6時20分から午前9時まで9枚の写真と整理した表、「おどるキノコ」のイカタケ、カゴタケ、アカイカタケ、の伸長の様子、「小さなコップのひみつ」のハタケチ

1988年12月23日	腹菌類の分類（全般）
1990年3月14日	腹菌類の分類（ニセシヨウロ・チャダイゴケ・ホコリタケ）
1991年3月1日	腹菌類の分類（メラノガステル・ケシボウズタケ）
1992年2月5日	腹菌類の分類（ホコリタケ属・ニセシヨウロ属）
1993年3月5日	腹菌類の分類（ヒメツチグリ科・シバフダンゴタケ・ダンゴタケ）
1994年3月18日	腹菌類の分類（スッポンタケ・ガウチュェリア目・地下生腹菌類）
1995年3月9日	腹菌類の分類（地下生腹菌群）
1998年2月25日	腹菌類の分類（メラノガステル目）
1999年2月18日	腹菌類の分類（チャダイゴケ目）
2000年2月3日	腹菌類の分類（ホコリタケ科） 別冊各論あり
2001年6月7日	腹菌類の分類（ケシボウズタケ目・クチベニタケ科・他）

チャダイゴケの peridiole (小塊粒) の飛散の様子は子供向けの本であるにもかかわらず、観察記録や実験はほかに例を見ないので専門家にとっても大切な文献です。「森の妖精—キノコ栽培の父、森本彦三郎」はキノコ栽培に没頭する態度、隠れた人物を掘り起こして世に紹介されたことはすばらしいことです。以上のように観察されたことは必ず絵に書かれることを大切にされたので、お宅には沢山の図が残されていることと思います。これを整理して一般に公開するとキノコの研究に大きく役立つはずです。ですから東京でのご講演と同時に行われた実習では必ずキノコ本体の図、顕微鏡観察の図を描くことが行われました。

先生のご研究はキヌガサタケ、イカタケ、アカイカタケ、カゴタケ、サンコタケ、チャダイゴケ、コウボウフデ、地下生菌、京都御苑の菌類相など多方面にわたっています。特に最近はどこに採集に行かれるのでも地下生菌を採集するための鉤のついた長い棒を持ち歩くといった具合でした。京都御苑のキノコについては1988年ごろから御苑で講師としてお話されるようになりテキストの内、私の手元にあるのは次の通りです。

- ① 環境週間 京都御苑自然観察の集い キノコのふしぎ、1988 : 6 : 5
- ② 京都理科研究会 同好部 学習会用 菌類の中のキノコという世界、京都御苑に見るキノコ、1988 : 8 : 6
- ③ —1 京都御苑ニュース 第18号 夏のキノコ歳時記 1988 : 6 : 1
—2 第19号 秋のキノコ歳時記 1988 : 9 : 1
—3 第20号 冬のキノコ歳時記、1988 : 12 : 1
- ④ 京都御苑自然現況調査報告第4集に「京都御苑の菌類調査による菌類追加目録」として58ページにわたって目録と34種のキノコについて詳しい形態と図、46のカラー写真 1988 :

6 : 15

(この他に、③の春のキノコ歳時記、④の第1集 1990年、第2集 1992年、第3集 1995年の中に菌類目録があります)

先生からお聞きした話ですが動物の糞につく菌に興味をもたれたときは動物園から糞をもらってきて家において観察されたそうです。おうちの方は困られたのではないかと思います。このような研究もまだ数が少なく貴重なものです。

先生は1928年のお生まれですから75歳と今ではまだ若いといえる年で亡くなりました。でも、お若いときから夜も寝ずの観察や小学校の校長という重要な仕事をされながら研究を続けられたことはお体に無理があったことと思います。晩年は腰痛、肺気腫などの病気を抱えながらのご研究でした。1985年に退職のおはがきには「第三の人生はくずれた体調を整え、今までの教育や菌類研究を生かし、…」と書かれていますし、1987年に米沢で採集をご一緒したあとのお手紙でも「帰郷して次の日舞鶴方面へ、しかし、体調がすぐれずで病院にいたりしています。」、1996年私の退職のお知らせをしたときも「腹菌類がありましたらまたお送りください。5月中旬までは入院していますので、その後にしてください。激務と労働に体が痛んでいますので入院治療することになりました。」東京に講演にいらした折もご飯物は食べられないのでうどんにするとと言われて昼食は常にうどんでした。そんな状況でもニコニコされながら楽しそうに集った方々をご指導されたことはとても印象的です。先生の菌学に残された足跡の偉大さが日本の菌学に大きな花を咲かせることを祈ります。残念ではありますが残された標本、図、写真、文章を通して若い方が研究をさらに発展されることを望みます。

(連絡先 : 〒187-0032 東京都小平市小川町2-1299-49)

吉見先生の思い出

本 多 澄 夫

吉見先生が愛知県へ採集調査に来られる様になったきっかけは、私のきのこの先輩になる黒柳先生がホンショウロを送ったことに始まる。

1976年10月24日2人で渥美半島の伊良湖国民休暇村周辺へきのこの調査に行き、国民休暇村構内でショウロを採集する。ここは人工的に造成されており、砂地の上に他から運ばれた土砂が盛り土されて、コウライシバが貼られ、所々にクロマツが植えられて適当に日が当たり風通しもよいところである。いつもショウロが出る海浜のクロマツ林には出ていなかったの、これは別種かと吉見先生に送り、今まで日本本土から採集記録のないホンショウロ (*Rhizopogon luteolus*) であることが判かった。

1977年4月5日早速吉見先生を現地へ案内する。発生個所に3人で割り箸を一つ一つ地面に刺して目印とする。黒松を中心に5個所に菌輪を作っていることが判り、その結果大きな菌輪では130個体に及ぶ多数の子実体からなっていることが分かった。国民休暇村のキャビンの管理人が京都出身の中村さんと判り、調査範囲内に人が長時間立ち入らない様に依頼する。

1977年11月6日更に多くの割り箸に赤と黄色のカラーテープを巻き付け、3人で出かける。菌輪ごとに色分けし、300本の割り箸も足らなくなった。輪と輪がぶつかる子実体が発生しなくなる様子がよく判る。

吉見先生は1978年から1980年の3年間に7回来られ、イカタケ、アカイカタケ、コイヌノエフデ、コギツネノエフデ、カゴタケ等調査されている。

1981年3月21日久しぶりに黒柳先生、吉見先生、横山和正先生と4人で渥美半島へ。横山先生は渡辺崋山の書いたきのこの絵画の調査が目的。国民休暇村でホンショウロ、コツチグリその他、特にヒメツチグリを丁寧に調査、終わり近くに不明種1個採集、後にドングリタケと名前が付く。

7月19日岡崎へ。アカイカタケ、コイヌノエフデ、不明種の冬虫夏草、これも後にヒメクチキタンボタケと名前が付く。

11月1日岡崎へ。イカタケ他、ツブレシロツチ

ダンゴをはじめて採集したが、このときは名前はもちろん属名も判らず、吉見先生も興味をしめされなかった。

11月15日伊良湖。ショウロ、ホンショウロ、コツチグリ、ドングリタケ等調査する。

1982年3月22日伊良湖へ。いつも愛知へ来たときは、途中で京都へ公衆電話をかけておられた。当時は携帯電話が無かったのである。今日は電話をかけなくていいんですか？今日はいいんだ、なぜか機嫌良く答えられた。しかし、「運命の一日」であった。静岡県の中田島砂丘へショウロの調査に向かった後、奥さんから電話が入り、伊良湖国民休暇村のスピーカーが何度も呼び掛けたがあの祭りであった。この日は5時過ぎ浜松駅に着くまで電話を掛けられなかった。市立翔鸞小学校から京都市教育委員会へ異動の連絡が入っていたのである。4月から多忙になられた事は言うまでも無い。

8月2日の手紙。『朝2時台風情報を聞きながら黒柳さんや本多さんの方はどうだろうとかと案じいます、また伊良湖岬が台風を中心といわれている通過大変でしょう。作手の方面がテレビでいわれたり、名古屋方面の出水などもいわれています。どうでしょうか、お伺いします。つぎの日曜日、8月8日いつものように岡崎へ行き、一緒に採集したいと思いますのですがどうでしょうか、ご予定があればそれを優先にしてください。いろいろな面で、おもしろいものが多くありますので気になりはじめました。もしよければ、そのようにお願いしたいと思っています。この夏休み、休みがありませんので二日～三日と連続で採集ができそうもありません残念です。大台ヶ原の方面も参加できません。よろしく願い申し上げます』当日8日は岡崎市内でカゴタケ、コイヌノエフデ、アカイカタケ等観察でき、ストレスを解消して満足して帰られました。

10月20日の手紙。『仕事が出てきてどうにもならなくなりました、出張の多いのが一番困ります。又考えて計画を立てていただきますか、岡崎、伊良湖方面行けません。お約束しておいてほんとう

に申訳ありません』

……現地調査を重要視していた先生の心情がよくわかります。病気になられた後も、珍しい物が見つかったら届けてほしいと言われました。ニッコウクロツチダンゴ、ナガエノケンボウズタケ、コナガエノアカカゴタケ等は届ける事ができ、大

変喜ばれましたが、現地へ案内する事ができず非常に残念に思います。

先生、沢山の思い出、有難うございました。

(連絡先：〒444-3502 愛知県岡崎市大幡町字東方便野21-1)

吉見昭一先生との思い出

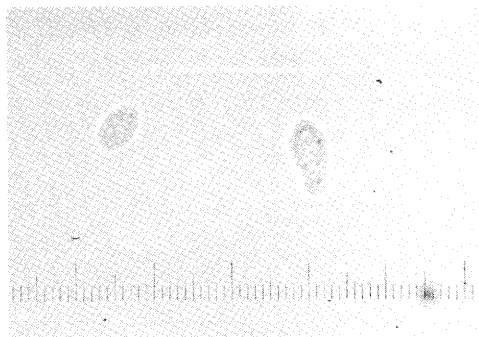
小 寺 祐 三

1999年10月10日、この日は京都市左京区の京都女子大学演習林でのきのこ調査と観察会の日でした。それまで3年間、ルツボチャダイゴケ探索を吉見先生と続けていましたが、いくら探しても見つかりませんでした。内心今日も見つからないかもしれないという感じをいだきつつ、針葉樹林へと入山しました。京都女子大学の先生、お二人と学生さん、一般の方々と共にひたすらきのこを求めて奥へと進むうちにベニヤマタケ、ミイノモミウラモドキ、カワラタケ、ロクショウグサレキン、スギヒラタケなどが採集されてもルツボチャダイゴケは発見できませんでした。やがて昼食の時間となり、吉見先生が腰を下ろされた瞬間でした。偶然、吉見先生と私との視線が同じところを見て

いたため同時に「アッ あった！」と思わず大きな声が出てしまいました。重なって落ちている杉の枝に混じったサクラの枯れ枝にコチャダイゴケに似るが個体はもっと大きく、褐色の小塊粒が見えている10数個の子実体が発生していました。吉見先生は「おそらく胞子は10 μm 前後あると思います、顕微鏡で確認をしてください」と言われました。帰宅してすぐに顕微鏡で観察を行い、胞子のサイズを計測すると大きなものでは10.5 μm の長径がありました。10個の胞子のサイズを測り、吉見先生に連絡をして標本と一緒に検鏡図版を描いてお届けしました。「やはりルツボチャダイゴケですね」と同定していただいた時は感動しました。「いくら懸命に探しても発見できなかったの



京都御苑自然観察会で「マツカサタケ」を解説中の吉見昭一先生（2002年1月20日）



Nidula candida (Peck) White 1902 (ルツボチャダイゴケ) と10.5 μm の孢子

に、見つかる時はこんなものです」との先生のお言葉が今も心に残っています。またもっと以前にも「この孢子をみてごらん下さい」といわれて小さな切片をいただきました。それは幻のきのこといわれる「キリノミタケ」でした。孢子をみて驚きました。長径が60 μm にも達する巨大な子のう孢子でした。また長い柄を有するアラゲホコリタケモドキの孢子も大変面白いものでした。その後も度々興味深い標本をいただいて私は顕微鏡学習の楽しさ、重要さを学んでゆきました。

また1997年10月に、滋賀県余呉町の山中にある「菅山寺」とその周辺にあるブナ林の観察に御一緒させていただいたことがありました。ブナの基部周辺で「こうやって掘るのですよ」と吉見先生特製の熊手を使って掘り方を教えていただきました。静かな本堂前の石段に腰をおろされての昼食中に「あの菅原道真お手植えの大ケヤキは立派な木ですね」と言われ、目の前の巨大なアカガシの幹に重生しているオニカワウソタケをご覧になると、「これは少ない大切なきのこですよ」と大事そうに見つめておられました。帰路、木之本インターチェンジ近くのスーパーで家内が「買い物をしたい」というと、吉見先生は「僕もいきたい」とおっしゃって店内を楽しそうに歩かれ「家内はほうれん草が好きやから買っていくます、ええのをみてください」と言われ、奥様おもしろい先生を知ることが出来ました。その表情にはあの眼差し鋭い観察中の眼ではなく、実に優しい目でした。

さらに滋賀県名産「でっち羊羹」が目にとまると、「これも家族が好きなんですよ」とおみやげにお二人のお子様の分も一緒に購入されました。常に御家族を大切にされていることがよくわかりました。帰宅してすぐに私も吉見先生の熊手と同じものを作り、柄と先端部を脱着式に改良して使用していますが、未だにトリュフは発見できません。

吉見先生の御自宅入口の左側に屋根まで達するビワの木がありました。お子達が幼かった頃にタネを蒔かれて成長した木でしたが、大きくなって根がはり、地面のコンクリートに亀裂がはしるようになってきたために先日切られました。私はこのビワの葉を毎年頂いて、自家製の薬草茶(18種)に加えています。私の家族みんながこのお茶を年中飲用し、非常に体調がよいと喜んでいます。その吉見先生宅のビワの葉も今年が最後となってしまいました。しかし現在、そのビワの種を鉢に蒔かれえたものが芽を出し、小さいながらも再び元気に成長を続けています。

私は京都御苑のきのこ観察会で十数年前に初めて吉見先生にお目にかかって以来、ずっと「きのこ」を親身に教えていただきました。以来私の人生は充実し、日々生甲斐を持って歩んでいます。吉見昭一先生に心から御礼を申し上げ、先生の御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

(連絡先：〒606-0032 京都市左京区岩倉南平岡町56)

吉見先生との出会い…そして、赤い菌糸に導かれて

富田友絵

吉見先生に初めてお会いしたのは、今からちょうど十年程前のことです。初夏の京都・稲荷山での「キノコ観察会」に参加させていただいたのが最初でした。先生との出会いは、私にとってたいへん衝撃的なものでした。今まで、食べ物としてしかキノコを見たことがなかった私に、吉見先生は人と同じく懸命に生きている生き物としてのキノコの存在を教えて下さったのです。そして、「キノコ達と同じ目線で、自然を見よう。この地球に生きているのは人間だけじゃない。あらゆる生き物達と共生していることを忘れず、自然を大切にしていかなければならない」とおっしゃいました。そして、今踏みしめているこの稲荷山をさして「キノコ達が生きるこの山は宝の山です」と目を細め、愛おしそうにおっしゃったのを昨日のこのように覚えています。吉見先生と出会ったこの瞬間から、私の人生観は大きく変わり始めました。今まで知らなかった世界を知り、日常の生活が好奇心いっぱいのわくわくするような毎日になりました。

それから、京都御苑で定期的に吉見先生がキノコ観察会をされているときき、参加させていただくようになりました。キノコの不思議さ、可愛さに魅せられて、また、森の匂い、落ち葉を踏みしめる感触が心地よく、そこに集まるキノコ好きの人との交流が温かく、ただただ楽しくて、夢中になってしまいました。キノコを見つけるたびに、

吉見先生が「いいキノコを見つけましたねぇ」とほめて下さるのがうれしくて、子どものようにキノコを探しました。観察会がない日、ひとりでわけいった下鴨神社糺の森で「ウロコケシボウズタケ」をみつけた時も、そのキノコが珍しいものとは全く知らず、吉見先生にほめていただきたい一心で報告をしました。日本で4例目の発見ということで、吉見先生がとても喜んで下さったことは、かけがえのない心に残る思い出となりました。

そして、ある日のことです。吉見先生が子ども達にキノコの役割の重要さや自然の大切さを説いておられるのを聞いているうちに、ひとつの思いが私の中に浮かびました。私が、キノコを知って、世界が変わったように、子ども達にもこのような瞬間が大切なのは言うまでもない。そして、それは健康な子どものみならず、病と闘う子どもにも必要なことなのではないかと。治療を受けながら、成長していく子どもにこそ、世界の広さを知って、生きる希望を持ち続けてほしい。そのために、病気の子どもの参加できる自然観察会ができればなぁと思いました。山を歩きながら、吉見先生にそう思ったこととお話すると、「それは大切なことです」と言って下さいました。その時から10年近くの時が流れ、看護大学の教員となった今、病気の子どもの自然と触れ合うことで、いきいきと輝ける時間がもてるよう、自然と子どもとの関わりについて研究することを、私の仕事としました。



ウロコケシボウズタケ



京都御苑観察会

研究に行き詰まりそうになった時は、吉見先生のお言葉が蘇ります。「人に認められなくても、成果がでなくても、ずっとずっとやり続けるのです。続けることが幸せなのです」と。吉見先生と出会ったことで人生の目標を発見することができ、さらに、「赤い糸」ならぬ「赤い菌糸」で結ばれたキノコ仲間と結婚して、余暇には京都御苑や清水山でキノコ仲間と自然を楽しむという充実した日々を送らせていただいています。

私にとっては先生の生き方がお手本です。「まずは家庭を大切に、そして次は仕事。それからキノコですよ」と、常におっしゃっていたことも忘れません。仕事のことなどで悩んだ時は、キノコ観察会に行って、さりげなく悩みを打ち明けると、

いつも真剣に考え、ひと言、的確なアドバイスを下さった先生。先生のそのお言葉から、どれだけ多くのことを学ばせていただいたことか！まさに、先生は私の人生の師でした。そして、先生が残して下さい、キノコを愛する多くの人との交流は、私の心の支えであり、宝物となっています。これからも、吉見先生が教えて下さったことや「赤い菌糸」で結ばれたご縁を大切に、がんばっていきたいと思います。吉見先生、ほんとうにありがとうございました。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

（連絡先：京都府宇治市広野町中島61-1 グラウンド 広野211）

マジックマッシュルーム騒動記

鳥 越 茂

平成14年6月6日より、サイロシビン又はサイロシジンを含むきのこ類（いわゆるマジックマッシュルーム）が麻薬原料植物として規制されることになりました。兵庫県では薬務課の麻薬係が窓口となっています。5月下旬にこの問題についての取り締まり会議が近畿地区で開催されたようですが、当初麻薬係ではこのきのこは南方系で、まさか県内に自生しているとは思ひもかけなかったようです。念のために私達の森林林業技術センターに確認の電話がありました。きのこのリストを見せてもらおうと、ヒカゲシビレタケのように見慣れたきのこも含まれており、このことを伝えると現物を確かめたいので、発生したら教えて欲しいと依頼されました。早速きのこの仲間に連絡を取り情報を待ちました。

6月下旬になってヒカゲシビレタケ発生の情報が入り、7月2日に県薬務課から2名、地元の保健所より1名、私達3名が現地に向かいました。ヒカゲシビレタケは群生しており、その一部は大阪の科学捜査研究所に送られ成分分析されました。8月になり、わずかですがサイロシビンの含まれていることが分かり、麻薬植物であることが確認されました。結果は国に報告され、取り扱い

について指示を仰ぎましたがなかなか回答が得られませんでした。15年3月やっと厚生労働省医薬局監視指導・麻薬対策課より“マジックマッシュルームに関するQ&A”の対応マニュアルとして回答がありました。私達は地元の保健所よりこれを手にすることが出来ました。

次に我々にとって一番関連の強い、採集会での取り扱いについて紹介します。

Q：一般人が自生しているきのこ類を採集した後、当該きのこ類がサイロシビン又はサイロシジンを含むきのこ類であると判明した場合はどうしたらよいですか。

A：採集したきのこ類が後にサイロシビン又はサイロシジンを含むきのこ類であると判明した場合には、直ちに厚生労働省地方麻薬取締部、都道府県麻薬主幹課又は都道府県警察に連絡して指示を受けてください（平成15年1月21日付医薬監麻発第0121001号）

つまり、マジックマッシュルームと分かったら直ちに上記の役所に連絡しなければなりません。きのこ採集会は日曜祭日が多く、すぐ連絡が付くかどうか心配です。

もう一つ、研究材料として私達はヒカゲシビレ



写真 兵庫県庁麻薬係との現地確認

タケの菌株を保有しています。この場合も、麻薬研究者として登録し、菌株は2重の扉のついた室内に重さ50 kg以上の金庫に厳重に保管することが求められます。私達は研究の対象としないことにし、菌株は処分しました。処分は勝手には出来ず麻薬係の指示により、所有放棄の書類とともに

菌株を保健所に持参しました。

以上がマジックマッシュルーム騒動の顛末ですが、これからもこの問題では悩まされるのではないのでしょうか。

(連絡先：〒671-2572 兵庫県宍粟郡山崎町庄能168-13)

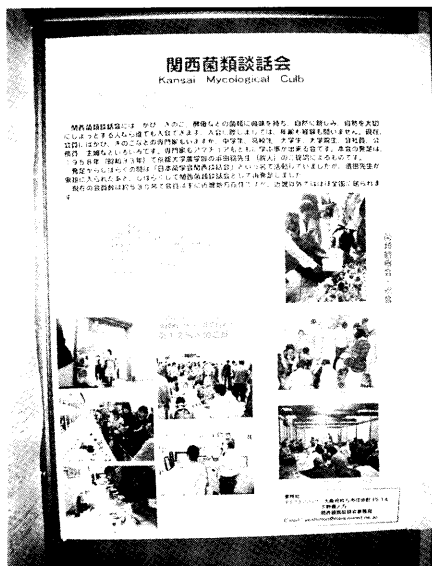
アマチュア研究者の取り組み 2003年

佐久間 大 輔

去る2003年5月31日と6月1日の両日、札幌市の北海道大学学術交流会館で第47回日本菌学会が開催されました。ポスター発表・口頭発表を含め百件を超える発表が行われ、菌根菌の生態から、DNAを利用した系統解析、キノコに含まれる生理活性物質の探索など様々なキノコとカビをめぐる研究成果の発表が行われていました(大会の講演題目一覧は日本菌学会のホームページ、<http://www.soc.nii.ac.jp/msj7/index.htm> で読めます)。

この大会のポスター発表に並んで、「アマチュア研究者の取り組み2003年」が開催されました。この催しは、おととしの東京大会から始まった、

まだ新しい試みです。昨年の信州大学での大会、そして今回と、徐々に参加団体も増え、今年は関西菌類談話会としても初めて参加したほか、石川きのこ会、菌類懇話会、甲斐塾、千葉菌類談話会、名護やんばるキノコ友の会、北海道きのこの会、北方菌類フォーラム、幼菌の会の合計9団体が展示として参加しました。各団体の活動紹介の他、各団体の会員の研究発表として、定点調査による菌類相の調査や、顕微鏡観察をした稀産種や未記載種の記録など、充実した展示が並びました。キノコ好きにとどまらず、アマチュアとしてのキノコ探求・研究にむけた意気込みが伝わるものでし



関西菌類談話会の活動紹介



各団体の発表の様子(その1)



各団体の発表の様子(その2)

た。千葉菌類談話会や菌類懇話会の冊子などの販売もありました。以前、京都大学で行われた菌学会の大会で Roy Watling 博士が紹介していたように、欧米においても菌学の発展には大学などの研究機関だけでなく、こうしたアマチュアの研究が重要です。分厚いアマチュアの研究が、自然の解明につながっているのは、キノコだけでなく野鳥や昆虫の研究でも同様です。今回の催しも全国のアマチュアの会が連携する事で、アマチュア研究が発展・活発化すれば、という事で企画されたものです。今年は談話会としては活動紹介をするに

とどまりましたが、例年スライド大会や総会などでも充実した観察記録が紹介されている事を考えると、積極的な参加も可能かも知れません。懇親会でもアマチュア研究談義が盛り上がったそうです(私は残念ながら参加できませんでした)。今回の菌学会では自由集会として「菌根研究者の集い」も開催されました。来年度以降も話題を絞った自由集会を開催したいという要望があるようです。

2004年度の菌学会は長崎(県立長崎シーボルト大学)で行われます。菌学の最新情報に触れるも

よし、全国のアマチュアとの出会いを楽しむもよし。学会と構えず、キノコを、菌を見つめる一人として、出かけてみてはいかがでしょう。

今回、参加に際し後藤康彦さん（菌類懇話会）、

竹橋誠司さん（北方菌類フォーラム）のお世話になりました。この場を借りて感謝いたします。

（連絡先：〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23、大阪市立自然史博物館）

京都府長老岳でアカイカタケ発生

西 川 忠 樹

2003年7月26日。京都府の長老岳旧登山道の口当たりのいい林道脇で落ち葉に埋もれるように生えているアカイカタケ *Aseroe rubra* La Billardiere を発見し写真に納めました（図1・2）。一頭体だけでした。

京都府内では鞍馬山での初記録（1935年）とそれに続いて1982年、1983年、1984年、1985年、1993年、2002年に記録されて以来の出現と思われます。京都府レッドデータブックでは「絶滅種」に分類されています。少し遅くなりましたが、貴会にご報告します。

なお、発見者はNPO自然観察指導員京都連絡会のメンバー（佐藤太蔵）です。

（会の連絡先：〒603-8162 京都市北区小山東大野町15）

※アカイカタケ発生についてのコメント

2003年は、アカイカタケの当たり年だったようですね。大阪でも2003年8月にアカイカタケが能勢町初谷と茨木市車作で観察されています。このうち、初谷の個体は標本として採集され、大阪市立自然史博物館に保存されています。大阪府下では初の記録であると思います（大阪市立自然史博物館友の会の月刊誌 *NatureStudy* 2004年3月号に報告しました）。

アカイカタケはキナバル山など熱帯山地林ではごく普通のキノコだと言われます。気象庁の記録を見ると、2003年8月の平均気温は例年よりも低いものの、毎日の最高気温の平均値はむしろ高く、最低気温が低かったようです。つまり、昼と夜の寒暖の差が大きかったと言えるのかも知れません。降水量も多かったようです。もしかすると、こんな気候が関係したのでしょうか。

佐久間大輔

（大阪市立自然史博物館学芸員、本会会員）



図1



図2

地方での菌学学習の困難さ

池 田 良 幸

(注：文中、キノコときのこが混在していますが、キノコ→子実体+菌糸体→生物体。きのこ→子実体のみ。と区別して用いています)

私がキノコに関わった切っ掛けは、教え子からきのこの名前を尋ねられ、何も答えられず、地方の大学へご指導を願ったら「本学には、その様な下等植物を扱う者はおりません」と門前払いを受け、大学の先生がやらないのなら自分がやるしかない、と決意し、底無沼へ足を踏み入れたのです。

全くの自己流で試行錯誤の連続、乾燥標本を作るにも何年も失敗しました。そして昭和32年、保育社から今関・本郷両先生共著の原色日本菌類図鑑が出版され、この本に出会った時の驚嘆は今も鮮明に蘇ります。

どうしてもこのお二人の先生から指導を受けたいと思いながらも、偉い先生方に突然何の紹介もなしにお願いするのはと、躊躇しましたが、まず、本郷先生にお願いしましたところ、すぐお許しがあり、早速滋賀大にお邪魔して、下手な描画や標本を同定していただきました。描画や標本作製について色々ご指導いただき、「今後もご指導をよろしく」とお願いして以来、毎年1回、半日の研修が40数年になります。

ヒダナシタケ類は今関先生にお願いし、先生も快く応えてくださり、葉山のお宅へ参上しました。そのとき、先生から拝聴したお言葉は生涯忘れ得ぬ大切なことで、教師としても大きな転機になりました。先生は「本郷君はね、1つのきのこを描くのになんかとも2時間、ときに半日掛けるんだよ。君の30分は30分の観察、本郷君の2時間は2時間の、半日は半日の観察で、質や量は違うんだよ。写真はピントを合わせている時だけの観察しかしていないんだよ」と言われました。自分が児童に十分な観察時間を与えずに、よりよい観察を強要していたことを深く恥じました。

さらに「君はキノコを学ぶなら、きのこだけでなく、キノコを取り巻く直接間接関係するすべてに気を配ること、それがキノコ本来の姿を明らかにすることだ」とも言われました。

Podostroma solmsii (E. Fisch) Imai f. *octospora* Doi を見つけたときのことです。本郷先生は、土居先生に尋ねるように言われ、今回も突然標本をお届けして同定をお願いしました。土居先生もご多忙な中でお調べ下さり、新品種として上記のように発表され、後日、私は拙著「石川のきのこ図鑑」に仮称スッポンヤドリタケとして紹介しました。その後、子囊菌類で大変お世話になりました。

こうして40年間お3人の先生方から懇切なご指導をいただきましたが、それは、あたかも発掘土器の破片を1片ずつ尋ねているようで、菌類全体のどこに位置付くのかははっきりしませんでした。

それが科博の菌類講座に出席して、今までの断片的な知識が順次組織立ち、菌類の世界の広大さに驚きの連続でした。そして人勢の先生方や全国の同士と親しく接する機会が得られ、井の中の蛙を免れました。

こうして厚かましく、ダニのようにしつこい私だからこそ、このようにして学習することができましたが、一般の方々には到底不可能に近いと思います。周囲を見回すと、地元の菌学学習環境は以前と比べてあまり進展がなく、キノコへの偏見蔑視があり、指導者、参考書が少なく、中央への講習参加もままならず、自然史系博物館もなく、顕微鏡に触れる機会も与えられず、今後の見通しも極めて暗いものです。

日本の菌学基礎研究が欧米より100年の遅れをみるとのことですが、地方はさらに遅れて数百年の遅れを感じます。そこで愚見ながら解決策を述べたいと思います。

日本では依然として生物=動・植物とする生物2界説が厳然として支配しています。これを政府

が改め、小中高校の理科教育のカリキュラムを改訂し、1960年代のようにカビやキノコの学習が実施されるべきです。

次に全国各都道府県に生態系を追求する自然史博物館を設置し、ここを拠点に生物を生態系で把握した国勢調査をする必要があります。当然菌類も含めます。今までの各種調査報告には、裏付け標本のないものが多く、信頼度の低い場合が多いようです。真の環境保全、生物保護のためにも大切な調査です。この調査のために、調査員の資質向上、各分野のレベル均一化のために、地方への

巡回指導も必要になると思います。

近年、マスコミも生態系に関心を持ち、色々と報道していますが、いつも動物と植物、生産と消費の関係に集中し、分解過程が等閑視されています。マスコミの方々にも真の生態系についてPRし、分解過程を分担する生物群に注目するように働きかける必要があると思います。

こうして、国民全体が菌類に目を向けるようにしないと、前途に光明が見えないようです。

(連絡先：〒921-8103 石川県金沢市つつじが丘137)

会報記事投稿のご案内

～皆様の投稿をお待ちしております～

- ◇原則として、投稿資格は本会会員に限ります（編集委員会から依頼する場合は例外とします）。
- ◇キノコやカビに関する記事、図、写真やイラスト、本誌に関するご意見などをお寄せください。
- ◇原稿の量は問いませんが、1600～2000字を目処にまとめていただくと幸いです。もちろん、これより多くても少なくてもかまいません。
- ◇図やイラストは黒インクで、刷り上がりの1.5倍程度の大きさでお描きください。カラーでの印刷はできませんので、白黒でも見やすい原稿の作成をお願いします。
- ◇写真の掲載を希望される場合は、あらかじめ編集委員会までおたずねください。（写真製版料をご負担いただく場合があります）
- ◇原稿は下記の送付先にお送りください。別紙に著者名、連絡先（住所・電話番号・FAX番号・電子メールアドレス）を書いて添付ください。ワープロなどをお使いの場合は、フロッピーディスクなどにテキスト形式のファイルで保存されたものを添付いただくようお願いいたします。また、電子メールを利用

できる場合は、電子メールでの投稿も歓迎いたします。

- ◇原稿の採否、掲載の順序、レイアウト等は、編集委員会の決定にお委ねください。
- ◇編集委員会は、著者の原稿中の字句、表、図、写真などのスタイルの統一や変更を求めることがあります。文章の用法上、あるいは、文法上の誤り、その他の修正は編集委員会にお委ねください。
- ◇原稿には表題、著者名、本文のほかに必要な場合は引用文献（あるいは参考文献）をあげてください。
- ◇著者校正は、初稿だけとし、原稿正本とともに返送ください。
- ◇掲載された原稿はお返ししませんが、図、写真に限り著者校正の際にお返しします。

<原稿送付先>

関西菌類談話会 会報編集委員会

丸山健一郎

〒639-0252 奈良県香芝市穴虫1204-3

TEL : 090-2701-3569 Fax : 0745-76-1966

E-mail : k-mal@minos.ocn.ne.jp

編集委員：横山和正、小林久泰、佐々木久雄、
上田俊穂（順不同）

表紙によせて

イボセイヨウシヨウロ・*Tuber indicum* Cooke et Massee

2002年10月に三重県内で初めて見つかった場所の黒トリュフです。最初の発見者は地元のきのこ採りの人で、イノシシが掘り返した後に転がっていたものを不思議に思い持ち帰られたものです。その最初のトリュフは最終的に吉見昭一先生の手元に届けられ、イボセイヨウシヨウロと同定していただきました。

この日見つかったイボセイヨウシヨウロはこの1個体だけでしたが、近くではクロアミメセイヨウシヨウロ（*Tuber aestivum*）と良く似たトリュフも見つけることができました。

詳しくは「今日のきのこ」（<http://red.sakura.ne.jp/~gajin/>）の2002/12/15、2003/01/04、2003/09/27、2004/01/02をご覧ください。

2004年1月2日 三重県多気郡宮川村にて 谷口 雅仁

編集後記

会報の発行が大変遅れましたことお詫び申します。会員諸氏をはじめ、稿をお寄せいただいた皆様には大変ご迷惑をお掛けいたしました。紙面の都合などの理由で次号に送らせていただいた原稿もあります。ご了承ください。今後、編集作業の効率を良くし、定期的な発行を出来るよう努力いたします。皆様の投稿をお待ちしております。

今号は昨年亡くなられた吉見昭一先生の業績や追悼文をまとめて掲載いたしました。本会会員には先生にお世話になられた方も多くと思います。あらためて先生のご冥福をお祈りいたします。

関西菌類談話会のホームページを下記アドレスで公開しています。充実した情報提供は出来ていませんが、ご利用下さい。ご意見・感想をいただけると幸いです。

（丸山）

<http://www.geocities.co.jp/NatureLand/2111/home.html>

関西菌類談話会会報 No. 25

2004年6月10日 印刷

2004年6月15日 発行

編集 関西菌類談話会会報編集委員会

発行 関西菌類談話会

発行所 関西菌類談話会

事務局 〒573-0017 枚方市印田町35-14

TEL. 0720-47-1386

下野 義人

郵便振替口座 00950-0-83129

印刷所 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る